

第131回簿記検定試験 2級 出題の意図・講評

【第1問】

(出題の意図)

1. 火災保険が付された建物が焼失したときの仕訳を問う問題です。保険金の支払いが確定するまでは、仮勘定を用いて記帳が行われます。
2. 委託販売のために商品を発送したときの仕訳、およびその際に荷為替の取組みをしたときの仕訳を問う問題です。委託先が実際に商品を販売するまでは売上とはならない点に注意してください。
3. 建物の建設工事を依頼し、手付金を支払ったときの仕訳を問う問題です。工事が完了し、引渡しを受けるまでは、建物勘定とはならない点に注意して下さい。
4. 株式会社が新株を発行して増資を行なったときの仕訳を問う問題です。資本金への組入れにかかわる会社法の規定に注意して仕訳をすることがポイントとなります。
5. 別途積立金の取崩しによる損失補填を行ったときの仕訳を問う問題です。繰越利益剰余金勘定が借方残高となっている点に注意して下さい。

いずれも仕訳問題としては標準的で基本的な問題です。暗記中心の学習を機械的に行うことは避け、取引の内容とそれを表す仕訳の関係を理解することに重点をおきながら、丁寧な学習を行うように心掛けてください。

(講評)

2級商業簿記の仕訳問題としては標準的で基本的な問題であったため、全体としては正しく解答した答案が多かったように思います。

ただし、特に2.については、正しく解答できていなかった答案が比較的目立ちました。委託販売および荷為替の取組みについて正確な理解が不足している受験者が多かったようです。また、4.については、増資に伴う株式募集のための広告費について、正しく仕訳できていなかった答案も比較的多くありました。

最後に、全体として正解を答えていた答案が多かった中で、ほとんど得点が取れていない答案も一方で目に付いた点を指摘しておきたいと思います。基礎的な学習を丁寧に行うことなく、明らかに準備不足の状態のまま、検定試験に臨んでしまった結果ではないかと推測されます。

【第2問】

(出題の意図)

普通仕訳帳の記入と各種特殊仕訳帳および補助簿の記入から、期中の取引を推定して処理し、月中の取引高と月末における各勘定の残高の算定を問う設問です。

本問では、普通仕訳帳と特殊仕訳帳の一部が括弧で空欄となっているため、まずこの空欄を推定しなければなりません。空欄の推定にあたっては、各種特殊仕訳帳が設けられた場合の普通仕訳帳の役割と、各種特殊仕訳帳間の関係が十分に理解されている必要があります、いずれの記入が二重仕訳となりうるかを意識しながら取引を推定していかなければなりません。また、答案用紙にも金額の推定に必要な情報が含まれているため、設問全体に目配りしながら、解答していくことも重要です。

(講評)

普通仕訳帳、特殊仕訳帳および補助簿の関係が十分理解されていないために、二重転記となる部分が特定できず、そのため括弧内の金額が適切に推定できていない答案が数多く見られました。各特殊仕訳帳の間でどの部分が二重転記となるかを改めて復習しておく必要があります。

本問では、売上帳の受取手形の金額と受取手形記入帳の売上欄の金額については、二重仕訳控除から推定しなければなりません、その二重仕訳控除の意味が理解できていなかったり、一部当座取引を見落としてしまい、金額が適切に推定されていない答案が特に目立ちました。

作業量はやや多めだったかもしれませんが、簿記では計算力も重要な要素なので、しっかりとした計算力を普段から身につけておくことが必要です。

【第3問】

(出題の意図)

本問は、決算直前の勘定残高に未処理事項の処理や決算整理手続きを加えて、損益計算書を作成する問題です。

基本的な問題の構造は、精算表を作成する問題と変わらないので、丁寧に未処理事項や決算整理事項を処理しましょう。とくに一部の未処理事項は、決算整理事項に示した資料に影響を与えるので、その影響について考慮する必要があります。例えば、売掛金の貸倒れの処理は、貸倒引当金の設定の処理に影響を与えるなどの事項です。

その他、研究開発用で購入した消耗品は研究開発費勘定で処理すること、の

れんの取得原価はのれんの期首未償却残高から推定することなどに留意する必要があります。

(講評)

本問の採点結果は、あまり芳しくありませんでした。問題に含まれる論点は、2級商業簿記の出題範囲から網羅的に取り上げられているので、該当箇所に戻って確認する作業を怠らないように勉強してください。

[第4問]

(出題の意図)

本問は、工場会計の独立に関する問題である。このように工場会計を独立した場合、本社と工場のそれぞれにおいて仕訳が行われますが、この問題では、工場元帳の勘定から、工場側で行われる仕訳が理解できているかを見るための出題としました。仕訳に際しては、材料費、労務費、経費という各費目別計算の基礎に関する理解ができていないと正解に至ることはできません。また、製造間接費に関しては、予定配賦とそれに伴う差異分析のための計算を理解していることが必要となります。本問のように、工業簿記の基礎として、費目別計算や製造間接費の予定配賦などの計算のみならず、それらに関する記帳手続についても併せて学習するように努めてください。

(講評)

本問のように、工場会計を独立した場合、本社と工場のそれぞれにおいて仕訳が行われますが、この問題では、工場側で行われる仕訳を解答してもらうものでした。ここで、材料費、労務費、経費という各費目別計算の基礎、さらに製造間接費に関しては、予定配賦とそれに伴う差異分析のための計算が理解できていないと、勘定科目と金額の双方を正しく記入することはできません。全体的には、残念ながら仕訳についての学習が行き届いていないようでした。満点の人とほとんど理解できない人に大きく分かれていました。簿記では仕訳を通して記録を行います。したがって、簿記の基礎として仕訳の理解は不可欠です。様々な金額計算を学習する際には、その仕訳についても学習する習慣をつけてほしいと思います。

[第5問]

(出題の意図)

オーソドックスな工程別総合原価計算で原価計算表を作成する問題です。工

程別計算は累加法であるため、第 1 工程、第 2 工程と順を追って計算していきます。

第 1 工程は、先入先出法による計算で、正常減損の発生があるパターンです。正常減損は終点発生であり、すべて完成品に負担させることとされているため、完成品総合原価の計算にあたって、正常減損量を加えた完成品数量を用いましょう。

第 2 工程では、まず、第 1 工程の完成品総合原価の合計額をもって前工程費の当月製造費用とします。あとは、平均法を用いて、単純総合原価計算と同様に計算していきます。

とくに難しい計算はないため、落ち着いて正確な計算ができたかどうかで点数が左右されるものと思われます。

(講評)

他の問題に比べるとよくできていました。工程別総合原価計算としてはオーソドックスな形式であり、過去にも類似の問題があったことから、得点のとりやすい問題だったようです。しかし、近年の得点傾向からすると、飛びぬけて高い得点というほどではありませんでした。第 1 工程に正常減損が発生していること、第 1 工程と第 2 工程では完成品と月末仕掛品への原価配分方法が異なることなどが、間違いやすいポイントといえます。基礎的な部分でのミスは大きな減点につながるため、これからも基本を大切にする学習を心がけていただきたいです。